

〈シンポジウム／カント『人間学』の世界——開講250年を記念して〉

カントの人間学講義における、 個人の「性格」概念を巡る思想発展

船木 祝

はじめに

カント倫理学が格率の倫理学であるということが、これまで強調されてきた。その格率の特徴を、M. アルブレヒトは次の二つに見る。まず格率は単なる普遍性の形式ではなく、実質であるところの目的に関係する、という点である。「主観は、ある目的の観点から自らの格率を根拠づける」。次に、「格率の多元性」である。「各人にはその作為や不作為を格率に拘束するところの、いくつもの格率がある」。このことは、「これらの格率を相互に調和させる」ための「性格(Charakter)」が問題となることを意味する(Albrecht [1994]:132)。上位の格率と下位の格率を関連づけ、前者から後者を導くことに性格がかかわる。たとえば、「依存しないで生活する」という上位の格率から、「けっして借金をしない」という下位の格率が導かれたり、「できるだけ長生き」という格率から、「1日一服以上のパイプを吸わない」という格率が導かれたりする。上位の格率はいかなる目標が人生に重要であるかという、その人の「熟慮(Überlegung)」に基づいており、そこから下位の格率である、持続的に自らに課す行動規則が導かれる(Albrecht [1994]:133)。このように諸格率がそれぞれ個人の性格に応じて配置されることがわかる。

格率の特徴について概観した後、アルブレヒトは、格率を巡るカントの思想発展について論述する。『美と崇高の感情に関する考察』(1764年)において、格率と同義である「原則(Grundsatz)」という用語が用いられ、次のようにカントは述べる。「真の徳は原則に基づく」にもかかわらず、「ほとんどの人は原則に従って行為しない」(vgl. II 217-218, 227)。「原則によってのみ確固たること(Standhaftigkeit)が獲得されうる」(vgl. II 221)。一方、「誤った原則は、その普遍性と持続性のために、ますます甚大な損害をひき起こす」(vgl. II 227)とも述べられる(Albrecht [1994]:135)。この時期のカントは、原則の重要性を認めながらも、それが悪しき原則となる場合の重大な影響を鑑み、原則概念の評価に曖昧性を残している。

さらにアルブレヒトは、カントにおける「格率」概念が、「意識的決意」であること、及び「ほとんどの人に……使用されていない」と特徴づけられていることから、それがヴォルフ主義者の当該概念とは異なる点を指摘する。A. G. バウムガルテンは、格率を「人が習慣づけた、行動規則」と定義する。しかし、アルブレヒトによれば、思想が成熟したカントにおける格率は習慣に基づくのではなく、自由に基づく。『人倫の形而上学』の徳論(1797年)では、「主観は、その道徳的格率の行使が習慣とされるとするならば、格率に関する自らの自由(Freiheit)を喪失する」とされる(vgl. VI 409) (Albrecht [1994]:135-136)。

アルブレヒトは、『実用的見地における人間学』(1798年)における、共和制ローマ後期の政務官

であったルキウス・コルネリウス・「(スッラのような)悪い性格の人ですら、確固たる格率の暴力性のため嫌悪の念をひき起こすものであっても、……驚嘆の対象である」(VII 293)という言葉を用いる。アルブレヒトによれば、驚嘆の理由は、悪しき格率であっても、その人が自由を行使している点にあるという。「格率は善きものであれ悪しきものであれ、……自由の表現である。人間はその自由を通じて、自分自身に性格を付与する、ないしは付与すべきなのである」。人は「自ら選んだ格率に自らを拘束する。……そのことにより、人は行為を……自然に依存しないものにする……」のである。「自由とは傾向性の強制からの非依存性、自律(Autonomie)による非依存性、すなわち、自身で自らに法則を与えることである」。たしかに、格率は、「道徳法則に従うことによって、……到達しうるような十全な自律」を意味しない。しかし、主観的原則である格率を自ら形成することがない限り、「その客観化可能性の尺度であるところの道徳法則」も意識されないのである(Albrecht [1994]:142-143)。『実用的見地における人間学』において、カントは、「特定の格率へと自由に自立して決心」することの意義を、「爆発(Explosion)」「変革(Revolution)」「再生(Wiedergeburt)」という表現を用いて強調する(VII 294)。アルブレヒトはさらに、1780年代初頭頃のものと思われる人間学講義『人間知(Menschenkunde)』における、「まったくなら格率に従って行為しない」人に対し、悪しき性格の人には「内的道徳的価値」があるという叙述(XXV 1169)を指摘し、これは誇張ではあるが、格率に従うことの評価に曖昧さがなくなったカントの思想発展を明らかに示すとする。格率を自らつくろうとしない限り、道徳法則も意識されないからである(Albrecht [1994]:143-144)。アルブレヒトによれば、カントのこの洞察こそが初期の著作とは異なり、悪しき格率形成の危険性がありながらも、格率概念の価値を上昇させたものなのである。

このようにアルブレヒトは格率概念の側面からカントの倫理学及び人間学に関する注目に値する考察を展開した。ただし、そこでも問題となると指摘されていた、個人の「性格」概念の考察は十分であるとは言えない¹。またアルブレヒトの分析では、後述するように、カントが「劣った性格」と「悪しき性格」の対比から、性格概念を形成したことには言及されていない。性格概念を長年にわたって論じているのは、人間学講義である。以上の問題意識の下、本稿は、性格概念を巡るカントの思想を、まず1760年代から1770年代初頭頃までにおける、諸気質の類型が前面に出る

カントの著書、レフレクシオン、講義録からの引用は、すべてアカデミー版カント全集による。ローマ数字がその巻数を、アラビア数字がページ数を示す。『美と崇高の感情に関する考察』の邦訳は、『カント全集』第3巻(理想社)、『人倫の形而上学の基礎づけ』の邦訳は、御子柴善之訳(人文書院)を参照した。人間学講義の年代設定に関しては、以下の文献が基礎になっている。Clemens Schwaiger, *Kategorische und andere Imperative. Zur Entwicklung von Kants praktischer Philosophie bis 1785*, Stuttgart-Bad Cannstatt 1999, bes. S. 105 ff., 110, 112, 124. 論理学講義の年代設定に関しては、以下の『カント・インデックス』が基礎になっている。Norbert Hinske, *Kant-Indexes*, Bd. 5, u. 6, Stuttgart-Bad Cannstatt 1995 u. 1999.

1 「性格をもつ」という特徴と、カントにおける「啓蒙」概念との関連づけに関しては、文献(宇都宮[2006]:83, 109, 230-231)を参照。宇都宮は、「諸原則を自分で選ぶこと」、「それらの原則の外的な普遍妥当性」、「それらの原則を堅持すること」という「啓蒙」の三つの格率のうち、第三の条件が、「確固とした考え方、または性格」に基づくという点を指摘する。各個人の格率が、「普遍性を含む格率」であることを命じる定言命法も、「自分で自らの格率を……確立しようとする人間」によって保証される。なお、カントにおける「人間性」概念形成の思想発展を明らかにするための、人間学講義における「人類の性格」に関する章の考察に関しては、文献(船木[2015]、及び船木[2020a]第二章)を参照。

性格概念の叙述、及び「悪しき性格」や目的との関連における性格概念の叙述について考察する(第1節)。この時期にはまだ「劣った性格」と「悪しき性格」との区別がなされていない。次に1770年代半ば頃から後半頃までの人間学講義におけるカントの性格の概念において、とくに「劣った性格」と「悪しき性格」の区別が前面に出る論述を考察する(第2節)。この対立軸が前面に出ることで、諸気質の類型に基づく叙述は後退する。さらに、1780年代初頭頃の人間学講義において、「性格」概念に関するカントの思想がどのような発展を遂げたのかを示す(第3節)。この時期のカントはほんものの性格の有する三つの特徴を明確にあげ、かつ自由な選択意志と結びつけて性格概念を論じるようになり、そこにカントの思想上の発展が明らかに認められる。そして最後に、1780年代半ば頃の性格の概念について考察する。ほんものの性格概念が有する三つの要素に関するそれまでの論述が、道徳法則と結合するときの「善い性格」形成についての考察のための、人間的土壌となっていることを明示する(第4節)

1. 1760年代から1770年代初頭頃までのカントの「性格」概念

1-1. 諸気質の類型

『美と崇高の感情に関する考察』において、カントはまず、「人に気に入られるために生きる」「迎合性(Gefälligkeit)」の感情に従う人たちを、「怠け者、大酒飲み」などと形容する。こうした人たちは、「不安定で原則を欠く」。これに対し、「真の徳は諸原則にのみ接ぎ木され」るのであり、「これらの諸原則は、……あらゆる人の胸の内に生きて……いる感情の意識である」と述べられる。それは、「人間の本性の……尊厳の感情」である(II 216-217)。前者の人たちは、「粗野な利己心(Eigennutz)」が優勢になれば、その美しい感情は「窒息」する。したがって、迎合性のような衝動は、あくまで「徳の補充」としての補助的なものなのであって、「養子縁組の徳(adoptierte Tugend)」と呼ばれる。「諸原則に基づく徳が真の徳」なのであって、そうした徳を有する人たちは「高貴な(edel)心情」のもち主であり、「率直な(rechtschaffen)」人たちとも呼ばれる(II 217-218)。

次に、「他人がわれわれの価値について有する意見」による「名誉(Ehre)」に基づく行為については、それは、「外面的見せかけ(äußeres Schein)」から起こることが多い。そして「名誉欲(Ehrbegierde)の動機」は隠されることが多い。こうした感情は、「徳に類似のもの」、「徳の虚飾(Tugendschimmer)」と呼ばれる(II 218)。

「道徳的性格」を規定しようとする、これら「迎合性」の感情、「名誉欲」、「人間の尊厳」の感情は「親近関係にある」ことがわかる(II 218-219)。一見、徳を示しているかに見える感情との違いを見きわめることによって、道徳的性格を特徴づけようとするカントの姿勢が認められる。

同著作でカントは、迎合性から振る舞うような気質の者を「多血質な(sanguinisch)性情の者」と呼び、彼は「交際上手で……道徳的共感(Sympathie)に富む」が、「原則を欠く」とする。「彼はすべての人の友であるが、……本来けっして友ではない」。また、「物惜しみせず、慈善を好む」、「彼はまさしく善くも悪くもけっしてない」(II 222)。

名誉欲から振る舞うような者は「胆汁質(cholerisch)の人」とされ、彼にとって、「体裁(Anstand)」や「見かけ(Schein)」が重要である。「彼がどうあるかではなく、どう見えるか」にのみ重点を置く。「礼儀」「礼式」「こびへつらい(Schmeichelei)」を重んじ、「多血質の人たちよりは、

……原則に従って行為はするが、……それは徳の原則ではなく、名誉の原則である」。「行為の……価値に対する感情をもたず、世間が行為について下すであろう判断に対する感情をもつ」。「彼は細心に自己を隠す」。また、宗教や交際、政党において、「偽善的(heuchlerisch)」、「こびへつらいの者(Schmeichler)」、「状況次第で変わりやすい」人たちである。「虚栄的、すなわち名誉を求め目立つように努める」(II 222-224)。

カントは、「諸原則に基づく」「真の徳」についての考察を、「憂鬱質の(melancholisch)人間」の分析に基づいて続ける。そうした人たちは、「人間性の尊厳についての高度な感情」を持ち、「嘘や偽装(Verstellung)を憎み、「真実(Wahrhaftigkeit)」を重んじる。彼は「堅忍不拔で(standhaft)」、「感覚を原則のもとに従属させる」。たとえば、彼の妻に対し、「尊敬の念をもって接する」といった、あるいは、「苦しんでいるから、あの人を助けに行く」といったような原則に依拠して行動する。彼は、「他の人がどう判断するか、彼らが何を善とし、何を真とするかを、気にかけない」。彼が「友人を失う」ことがあっても、「友人が彼を同じようにすぐには失うことはない」。彼は「自分及び他人の秘密をよく守る」。「彼は自分自身を評価し、また人間を尊敬に値する被造物であると見なす」。彼は「世間に飽き飽きし」、「高貴な胸のうちに自由を呼吸する」。しかし一方で、こうした性格における「堅忍不拔は、わがまま(Eigensinn)に変質する」。その「厳粛(Ernsthaftigkeit)は憂鬱(Schwermut)に、敬虔は狂信(Schwärmerei)に、自由への愛着が熱狂(Enthusiasmus)に」変容する。彼に「復讐心が点火」すると、「きわめて恐るべき者になる」。また、彼の「感情が転倒(Verkehrtheit)し、晴れやかな理性が欠如すると、怪奇(das Abenteuerliche)に陥る」(II 220-222)。このように、諸原則に従う憂鬱質の性格の人は両面性があり、家庭愛や人助けや友情において堅固さを示す一方、鍵のかけ方を間違えると、恐るべき状況を生み出すことがわかる。同著作では、徳のための諸原則に従うことの重要性が強調されているが、その明確な優位の論調は見られない。

1-2. 「悪しき性格」や目的との関連における性格概念

1772年から73年にかけての冬学期のものと推測される『パロウ人間学(Anthropologie Parow)』において、「悪しき(böse)性格の者」について、次のように叙述されている。「私たちの本性の目的のために据え置かれたはずの真の萌芽が欠如しているがゆえに、反対である善なる性格には、けっして至りえない」者のことである。また、性格は、成長過程において、「よりひどくなったり、よりよくなったり」するといった表現が見られる(XXV 438)。当講義録では、まだ「劣った性格」と「悪しき性格」の明確な区別がなされていない。

個々の人間の性格が、その人それぞれの「本性のうちにある目的」との関連で論じられる。各人の性格を「規定するのは困難」なのであるが、人のもつ意志は、それぞれに「特別(besonders)」な性質を有しており、何をを目指しているかという目的という観点から調べられるということである(ibid.)。究極的には、それぞれの人のもつ「主観的法則」に則って見わけられる。たとえば、ある人は行き着くところ、「慈善を施すこと」を最終的に目的にしているということが、別の人は、「名誉」を求めていることがわかる。しかし、性格は「錯綜した」ものであり、その人たちの「主要目的」は何なのかを識別することは困難なことが多い(ibid.)。このように性格概念が、すでに1770年代の前半期頃から、目的との観点から論じられていることがわかる。

2. 1770年代半ば頃から後半頃までの「性格」概念 ——「劣った性格」及び「欺瞞的性格」と、「悪しき性格」との区別

1770年代半ば頃のものとして推測できる『フリートレンダー人間学(Anthropologie Friedländer 3.3 [Ms. 400])』において、「劣った(schlecht)性格」と「悪しき性格」が明確に区別されている。「劣った性格の人」とは、「原則に従って行為する能力が認められない」人のことを言う。つまり、もっぱら人の指示による「あんよ車のような規則に縛られているような、幼い魂」のことを言う(XXV 650-651)。たとえば、そうした人は学校での教育においてどのような素材を提供しても、それらに「賛同はしても、なにひとつ採用しない」。みずからの「判断力」を使用しないため、教えられたことにただ賛同はしても、それを自らの実践的規則として採り入れようとはしないのである。したがってカントは、「悪しき性格の人」の方が、「多くの善きことをつくり出せるような……萌芽がある」と述べる(XXV 651)²。まずなによりも劣った性格でないことが重要であるのである。そこで問われるのは、「原則に従って行為する能力」である。「悪しき性格の人は、善い原則に従って起こるようなすべてのことに対する憎悪と反抗がある」。たとえば、「人間に対する敵意(Menschenfeind)」といった、善に対抗する原則を、「情熱や傾向性をも制御して、規則にまでもち込む」(XXV 651-652)。当講義録における「劣った性格」と「悪しき性格」の明確な対置は、諸気質に関する並列的な叙述を後退させたと考えられる。不動の原則に従わない人たちと、悪しき性格の人を含む不動の原則に従う人たちの対比が前面に出る。そもそも原則に従うような性格がなければ、善にもなりえないからである。

当講義録ではさらに、「欺瞞的(betrüglich)性格」と「悪しき性格」とが区別される。「欺瞞的性格」の人は、「他者を抑圧することに快楽を見いださないし、敵意といった悪性ももちあわせていない。しかし、卑劣な嘘によって他者を欺こうとする」のである。「名誉」という用語は1770年代初頭の講義録にも登場していたが、1770年代半ば頃のカントは、欺瞞的性格という表現をそれに結びつけ、欺瞞的性格の人には名誉がないとして、考察を深化させる。そのような「嘘、偽り、欺瞞」の人は、名誉の反対であるところの「最大の軽蔑の対象」となる。そうした欺瞞は、「こっそりとしており、公とはならない。したがって、人がそれに気づくのは容易ではない。そのため、それに対して対抗措置をとることもできない」。これに対し、「悪性や敵意を有する人に対しては、対抗措置をとることができる」。悪しき性格の人には「良心はない(gewißenlos)」が、「ごくわずかであっても名誉はある」(XXV 652)。

このようにこの時期のカントは、性格の善・悪を問う以前に、「劣った性格」及び「欺瞞的性格」でないことの重要性を強調する。1770年代半ば頃にはすでに、悪しき性格には原則に従っており、かつ公然としている点において、その優れた点があることを認識していた。まだしも悪しき性格の人は、善きことへ転向する萌芽がある。たとえば、「子どもが若い時期、盗みへの傾向を示すとしても、……なんらかの理由でその卑劣さを洞察できるとすれば、子どもはそれを取りやめる

2 以下の人間学講義の自筆メモを記したレフレクションにも、性格をもたないことと悪しき性格との対比が認められる。『レフレクション』1113番：「性格には……堅固性(festigkeit)と統一性が必要である。多くの人は、性格をもたないがゆえに、善とも悪とも呼ばれない。」(XV 496)；『レフレクション』1518番：「性格に向かう素質になるような、気質における悪性の方が、性格を欠く善性よりはましである」(XV 869)。

かもしれない」(XXV 654)。一方、年齢を重ねた大人の場合は転向が難しいともカントは述べる。たとえば、「他者が見舞われる損害を好む」人はいるが、「およそ40代には性格が定ま」ってしまい、改善は難しい。なぜなら、年齢とともに、「本能と傾向性が力を失い、概念が場所を占める」ようになるからである (ibid.)。

原則に従うという、こうした性格の特性を強調することは、さらに単に「善い意志」の「道具」であるものと、「それ自体善である」ものとの区別立てを前面に押し出す契機のひとつになったと考える。それ自体善である意志は、「人間を単に目的のための手段として」扱うのではなく、「人間がそれ自体」目的であるという原則に、「感覚」に拠らずに「悟性」に従って接ぎ木された意志なのである (XXV 649)。

1770年代後半頃のものと思われる人間学講義録『ピラウ人間学 (*Anthropologie Pillau*)』において、カントは、「劣った性格」について、「意図としてなんら悪いものがない場合であっても、手段に関しては、最善の道に従わない」ものと定義する (XXV 825)。意図はいくらでも善なるものを掲げることができるだろう。しかし、右往左往し、それを実現するための手段を間違えば、かえって害悪を招く。

カントは、揺れ動く性格と不動の性格という区別に言及し、例を用いて叙述する。たとえば、「他者に奉仕するために、言いつけをよく聞き従順で」あるような善い心情をもつ人や、また、「自分ではたしかに語りたいたいと思っても、意見の多くを隠す」人たちには、「確固不動の (*unverbrüchlich*)」性格がない。確固不動の性格がない人は、「格率をもたず、つねに刺激によって動かされる」。これに対し、「諸原則に固執」する人には、「善か悪か」いずれかの不動の性格があるのである (XXV 822)。子どもにも、「原則に忠実であろうとし続けることが名誉」であることを教えずなくてはならない。「年齢とともに、概念が洗練され、概念によって導かれる諸原則に従う性格が形成」される。悪しき性格であっても、「尊敬に値する (*achtungswürdig*)」。なぜなら、悪しき性格は、「よりよい指導が得られるとするならば、善になったであろう」からである (XXV 823)。

3. 1780年代初頭頃における「性格」概念

—— 「ほんものの性格」の三つの要素と、「選択意志の自由」の概念との結びつき

『人間知 (*Menschenkunde*)』において、「特定の性格をもたない人は、気分に従う」とされる。「彼は機会のあるごとにその都度、別の人間である」。カントは、「支出 (*Ausgabe*)」を例にあげる。お金の使い方に一定の方針がなく、その都度、気まぐれに支出する人たちのことである (XXV 1169-1170)³。

「劣っている」とは、「思考様式 (*Denckart*) の卑劣さ」を意味する。劣っている人は「治しがたい (*unheilbar*)」。これに対し、「人の不幸を喜ぶこと (*Schadenfreude*)」は、「人間の性格の悪性」を示すのであるが、それは、是正可能である。人間相互関係において、原則に従って「偽り (*Falschheit*) や不実 (*Treulosigkeit*)」であろうとする「悪しき性格の人は、ぞっとはするが、驚嘆」に値する (XXV 1169-1170, 1172)。

3 『レフレクシオン』1158番では、「特定の性格」について、「規則によって規定されるすべてを、規則から判断する」と説明される (XV 512)。

「劣った性格」の人には、忠実さに対する「名誉心(Ehrliche)」が欠ける(XXV 1170)。これに対し、単なる感覚ではなく、「恒常的思考様式」に従うところの「特定の性格」には、「内的道徳的価値」があると述べられる。そしてカントは、特定の性格の持ち主の第一の特徴として、「自分自身に対して約束することを守る」点をあげるのである。これが名誉欲とは異なる名誉心の特徴づける⁴。「ひとたび諸原則を把握したならば」、人はそれらを行為の諸規則として、「厳格に採り入れなくてはならない」。それは、人が「自分自身を軽蔑しない」ためである(XXV 1169, 1173)⁵。1770年代半ば頃の講義録に認められた、「欺瞞的性格」に対立する「名誉」に関する叙述内容が、この『人間知』において、「自分自身に対する約束」という表現によって明確な定式化に達していることがわかる。ここには思想的に発展したカントの叙述の明瞭化が認められる。

こうした堅固な性格の人には、「友情においても、行為においても、宗教においても、すべての事柄において、彼の格率がある」のである。たとえば、「流行に従うという原則」もそれはそれで、そうした性格を形成しうる。ほんものの性格の有する格率の特徴として、カントは三つをあげる。ひとつめは、一切の嘘は軽蔑に値するとする「真理に対する愛」である。二つめには、敵に対してであっても、「なにかを約束したら言葉を守る」ということである。三つめに、「こびへつらいの人」に著しく低い価値を与えるということである。それは、「他者からの影響をあまりにも多く気にとめる」からである(XXV 1170-1171)⁶。

このようにほんものの性格が有する諸要素をまとめたうえで、カントは、「高貴な性格」について、次のように叙述を続ける。彼は、「だれにもスキャンダルを付与しない」、「だれかの不利になるようなことをけっして語らない」、「当人について不利なことを語った内容を当人が聞けば不快になるがゆえに、その人について他者が語ることを知ろう」としない。これに対し、「他者の言っていることに従う」人たちは、たとえよかれと思ってであっても、道徳的性格を「腐敗」させるのである(XXV 1171)⁷。このように、カントは真理への愛をもって、自分自身に対して約束を守

- 4 「劣った性格」を特徴づける「名誉欲」に関しては、文献(キューン[2017]:544-545, 914(注) 26)を参照。名誉は、プロイセンという身分制国家にとっては、貴族のみならず、諸都市の市民にとっても重要な道徳的指針であった。こうした気風をよく経験していたカントは、外面的形式の名誉を道徳的格率の基礎とすることを拒否したという。
- 5 『レフレクシオン』1518番では、性格を欠く「名誉欲(Ehrbegierde)」と名誉心が対置される(XV 870)。同『レフレクシオン』ではまた、個々の人間固有の性格が示す特徴として、「自分自身の言葉を守る」こと、「性格のない人が軽蔑されるという考えをたえず抱くこと」、「生活様式、経済、交際、道徳、宗教において、自ら恒常の原則を見いだそうとすること」があげられる(XV 867, 869)。
- 6 『レフレクシオン』1518番によれば、「偽善であったりこびへつらいであったり、……面前では好意的であるが、陰で敵対的である」ことが、「偽り」とされる。そして、人間嫌いや他人の不幸を喜ぶ心などではなく、「偽りが本来性格における悪性である」と述べられる(XV 870, 872)。
- 7 「よい心持ち」について、次のようにある。『レフレクシオン』1160番:「人間は、よかれというよい心持ちから、悪しきことをなしうる」。「こうしたよい心持ちの人を善い性格に先だって育成しようとするのはきわめて有害である」(XV 513-514)。陰口については、次のようにある。『レフレクシオン』1518番:「浅はかであったり、たちが悪かったり(boshafft)する他者の判断である、陰口を気にとめてはならない」(XV 871)。『人倫の形而上学の基礎づけ(Grundlegung zur Metaphysik der Sitten)』(1785年)において、カントは、世間的憐憫を特徴づける「名誉の傾向性」に基づく、慈善家による親切には、「ほんとうの道徳的価値」はないという。これに対し、いっさいの「傾向性なしで義務に基づいて」親切を行う「気質の点では冷たい」人には、「一切の比較を絶した最高の価値である性格の価値」が働いているとする(IV 398-399)。

るという名誉心を道徳的な性格の第一の特徴として強調し、さらに他者からの影響をあまりに斟酌しすぎることを諫める。それは、自分の心に嘘をついて、周囲に合わせ、誰かの不利になるような噂を語り合うことで得られる快の感情に従うことが、道徳的性格を腐敗させる大きな力を持つことをカントが洞察していたからだと考える。

年代別の叙述は当講義録においても認められる。「40代前の人にほんものの性格が表れるのはきわめて稀である。まだ思慮のなさが取り払われていない」からである。この年代以前は「まだ、洞察力が未熟であって、真の関心と仮象の関心が区別されていない」(XXV 1174)⁸。一方、単なる感覚ではなく、「恒常的思考様式」に従うような、かつ「幸福に値する」ような「特定の性格」は、「内的道徳的価値」がある(XXV 1169, 1174)。

当講義録で注目に値する点は、性格の概念が「自由な選択意志(freie Willkür)」との関連で扱われている点である。それは、「感性的衝動による強制に依存せずに、自らを規定しうる能力である」⁹。そして、「性格は、自由な選択意志の問題である」と述べられる(XXV 1174)。性格概念を扱う文脈で選択意志の自由の問題が強く出てきた背景には、他者の影響下で自分の心に嘘をついて、陰口を語り合う快の感情がほんものの性格の形成を妨げているというカントの人間学的洞察があると考えられる。

カントはここで言う自由意志とは、自らの行為の格率を他者に決めてもらうのではなく、行為の格率を自ら決める意志のことである。行為の格率を自ら設定する意志を意味する。それは道徳的であるとは限らない、非道徳的行為の格率を採択することもある。その選択の自由がなければ、そもそも「理性に基づく」(XXV 1176)道徳法則を自らの格率に採り入れることも成立しない。たとえば、怠けたいという感覚によらずに、意志が、「勤勉によって才能(Talent)の欠如を補おう」と選択するならば、「善なる性格」が形成されるだろう。各人にどのような「才能」が付与されるかは「幸運(Glück)」に関わることであるが、自由な選択意志が、与えられた「才能を十分に用い」ようとするかどうか、性格のあり方を規定する(XXV 1174)。このように自由な選択意志により、道徳的性格が形成されうるがゆえに、「人間は自分自身の価値の創始者になる」ことができるとも述べられる(ibid.)¹⁰。

8 『レフレクシオン』1518番において、「40代の頃にはじめて、適切な思考様式(伶俐、すなわち真の関心と仮象を区別する能力も)、(物事の価値を評価する能力も)が形成される」と述べられる(XV 873)。1780年代の初めのものとして推測できる『ウィーン論理学』では、「部分的真理」概念を扱う文脈において、論争における「敵」としての関心と、「共同体的関心(gemeinschaftliches Interesse)」との二つの「関心」が区別される。後者では、「真理の探究」において、自分とは反対の陣営が「誤っているとしてもそこにとどまらず」、どこか「正当性がないか」を探求するところの「参加的(theilnehmend)」態度がとられる(XXIV 828)。なお、カントにおける「部分的真理」の概念には、真理は程度の差こそあれすべての人間に分け与えられている。したがっていかなる考えも、十把ひとからげに間違いであると決めつけてはならないという「ドイツ啓蒙思想の根本思潮の一つ」が示されているということに関しては、文献(船木[2020b]:84-85)参照。

9 Vgl. Eisler [1989]:607, Artikel 'Willkür'.

10 『レフレクシオン』1517番では、人間は「自由な意志」によって、彼の「気質を自ら切り替えることができる」と述べられる(XV 866)。『レフレクシオン』1518番では、人間は「彼の気質に対抗し、……彼自身の価値の創始者」になるとも述べられる(XV 868)。『レフレクシオン』1118番では、性格の概念が、「すべての傾向性を規則に従って用いる、自由の能力」と定義される(XV 499)。『レフレクシオン』1122番では、「すべての才能を用い、自然的なものや気質を統制する、選択意志の特別な性質が、性格である」と定義される(XV 501)。

当講義録において、名誉のために「自分自身に対する約束を守る」という、ほんものの性格の第一の特徴が明示された点、及び自由な選択意志との結びつきで性格概念が論じられている点に、カントの思想上の発展が明らかに認められる。前者においては、陰口が人間の道徳性を腐敗させるというカントの人間学的洞察が根底にある。その洞察は他人の思惑を気にする世間的恫喝の価値の著しい引き下げを起こした¹¹。

4. 1780年代半ば頃以降の「性格」概念

——「善い性格」形成の人間学的土壌としての「性格」の三つの要素

『人間知』において言及されていた、「自由」、「選択意志」との関連における性格概念の論述が、1780年代半ば頃のものとして推測される『ムロンゴヴィウス人間学(*Anthropologie Mrongovius*)』では、「人間の本来の性格、あるいは自由の性格について」というように章の表題において記され、前面に出ている。「自由な性格が本来の性格である」、「性格とは諸原則に従った人間の意志のことである」、「自由な意志という特性が、人間の本来の性格の本質をなす」、「性格とは、人間の選択意志が持続的(*daurend*)で了解可能な諸格率により規定」されることを意味する(XXV 1384-1385)。

このように本来の性格が成り立つためには、まずなによりも「自由な意志」が示されなくてはならないことを強調したのちに、カントは、性格について、引き続き「自分の意志があること」という特徴をあげ詳述する。カントによれば、「わがまま(*Eigensinn*)」と「自分の意志があること」とは区別されなければならない。「わがまま」とは、「傾向性を統制でき」ずに、「本能や気分に従う」状態のことである。これに対し、「自分の意志がある」人は、「熟慮」に基づき、「堅固で特定の諸

11 河村は、18世紀のドイツ神学者F. ヴァーゲナーにおける「事象ないし心の活動性」の三つの階層理解を提示する。第一層に「ゼンマイ仕掛けの時計」にも見られるような「自発性」があり、第二層に、「自分自身の願望に従って様々なものへと向かうことができる」「随意的な自己活動性」である「選択意志」がある。これは「感性的な嗜好にも知性的ないし理性的嗜好にも従うことができる」。そして、第三層に、上級認識能力である「理性」及び上級欲求能力である「意志」にのみ従うところの「自由な選択意志」がある(河村[2022]:20, 23, 26, 215)。この三階層の区分に基づき、1770年代後半頃の形而上学講義におけるカントによれば、第二層の選択意志は、「刺激による強制から……独立」した、派生的な「実践的ないし心理学的自由」である。カントによれば、さらに、「根拠律の制約を受けない」「超越論的自由」が、第二層の心理学的実践的自由を条件づけなければならない。これは、「すべての外的強制から独立し」、端的に「ある状態を自ら始める能力」である、「始源的」自発性である(河村[2022]:140, 142, 217-218)。河村によれば、バウムガルテンは、このヴァーゲナーにおける心の活動性の三階層に倣い、「自発性」、「選択意志」、「自由な選択意志」の区分をしたという。Chr. ヴォルフにおいては、本能のような感性的衝動から独立に、「理性の示す動因」に従う心理学的自由が論じられるが、『純粹理性批判』のカントによれば、この心理学的自由が成立するためにも、「経験的な一切の制約から」独立した理性が「選択意志を条件づける」、「超越論的自由」がなくてはならない。カントは、心理学的「実践的自由だけでア・プリオリな道徳法則の基礎づけを行おうとすることに對する明確な異議を示す(河村[2022]:41, 221-222, 224)。このような実践的心理学的自由が超越論的自由により条件づけられなければならないという理解が、自由な選択意志の位置づけを明確にし、『人間知』においても、自由な選択意志と性格概念の結びつきを強調する論調が前面に出た背景にあったと考える。なお、批判書の人間学的地平を掘り起し、決定論と自由に関するカントの考察における問題点を考究したものとして、文献(井上[1990]:171-193)を参照。

原則に従う」。また、「自分の意志がない人は、なにものも拒否したりせず、悪い性格すらもたないで、怠け者であったり、大酒飲み、ギャンブラー」であったりする (XXV 1386)¹²。これに対し、「自分の意志がある」人は、「他者が彼についてどう判断するかを意に介さない」で、申し出や提案や意見などを拒否すべきときには拒否する (ibid.)。このように、1770年代半ば以降の「劣った性格」と「悪い性格」の対比に基づいて形成された「性格」概念の、1780年代初頭頃に定式化された特徴が、当講義録において「わがまま」という新たな対比概念を用いてさらに強調されたと言える。「わがままな人」は、傾向性に左右され、他人の思惑を気かけ、なにごともしっかりと否定せずに、本能や気分に従う。「自分の意志をもつ人」は、本能や気分を左右されずに、他者の思惑を気にしないで、熟慮に基づいて特定の格率に従うのである¹³。

当講義録においても、『人間知』と同様に、本来の性格が有する格率が示す特徴として、次の三つが指摘される。すなわち、「自分自身の言葉を守る」こと、「他者に対して言葉を守る」こと、「こびへつらい」を諫めることの三つである。第一のものは、「自己の理性と自分自身の性格に対する尊敬」の念に関わる。人は、自分に嘘をつくならば、自分自身を尊敬の対象とはできなくなる。たとえば、早起きするといったん決めても、実際には実行されないとするなら、自分の性格を信頼することはできなくなるだろう (XXV 1387-1388)。第二に、他者に対して言葉を守るには、「約束する以前に、すべてをまず熟慮すること」が必要である。よく熟慮もせずに、軽々しくあれこれと請け合うことは、慎まなくてはならない。他者に対して言葉を守るためには、いったん採用した諸原則を恒常的に遵守することが必要である。そして、性格をもたないことが軽蔑の対象になることを肝に銘じておかななくてはならない。第三に、「こびへつらい」は、自分の「価値を犠牲にする」。それは「見た目には友好的ではあるが、人に知られないところで、偽りの」態度をとっている。これに対し、「率直な人」には性格がある (XXV 1388-1389)。「うわさなどを言いふら (Zutragen)」したり、「人のことを悪く言う」人は、ひとたび友人になっても、「状況が変われば私から離れ」ていく。「友人のいっさいの秘密を守り、それを彼がなんら不利になるように用いない」人は、「高貴で」ある (XXV 1389)。

当講義録においてカントは、さらに「一般の幸せ」へとたえず気が向かっており、「道徳化され」、「人倫の格率」に従うところの (XXV 1385, 1387)「善い性格」の人について、特徴を四つあげている。それは、「持続的に普遍的に善であること」、「社会において他者のうわさなどを誤用しないこと」、「社会においてなにか悪しきことが語られていたら、沈黙しない」こと、「貪欲や虚栄ではなく真の名誉心をもつ」ことである (XXV 1389-1390)。社会での他者関係において、他者の被害になるような噂などを慎むいっぽう、なにか悪しきことが流布していたら、沈黙しないことがとくに力説されている。1780年頃以降の考察において、「劣った性格」との対比において示された、「ほん

12 『レフレクシオン』1517番では、「あらゆる人に気に入られ、賛同されようとする」迎合的な人の例に、「大酒飲み、ギャンブラー、絶えず不安に駆られている者 (Umtreiber)、すっぱかす者 (Versäumlter)、宗教をあざ笑う者 (Religionsspötter)」などがあげられる (XV 865)。

13 『純粹理性批判』出版とほぼ同時期のものと見られる『ペーリッツ論理学』講義における、「客観的であるか主観的であるか知らないような、不十分な根拠に基づく信憑である」[「思い込み (Überredung)」]と、「認識がどのような認識能力に属するものであるかがわかっている」[「熟慮 (Überlegung)」]と、「客観に関する根拠が十分であるか、不十分であるかがわかっている」[「探求 (Untersuchung)」]という概念の区別 (XXIV 559)については、文献 (船木[2020b]:86)を参照。

ものの性格」及び「高貴な性格」概念を踏まえることによって、本講義録では、「善い性格」は、そうした性格が道徳法則と結合するときに成立することが明確に叙述されている。1770年代半ば以降「劣った性格」と「悪しき性格」との区別の考察がなされていたわけだが、1780年代初頭頃以降、深化され、「劣った性格」と対比されるころの、自分との約束を守るというほんものの性格の第一の特徴が明確にされた。そうしたカントの思想の成熟を示す性格の特徴づけがあったがゆえに、本講義録における、それが道徳法則と結合するときの、善なる性格の特徴づけが可能になったと考える。

おわりに

以上、性格が道徳法則と結合するときの「善い性格」形成のためには、1780年頃以降の「ほんものの性格」及び「高貴な性格」に関するカントの人間学洞察があったということを跡づけてきた。そうした性格の人間学的土壌がなければ、そもそも道徳法則を格率に採用することも成り立たない。カントは、長年にわたり「性格」概念を「劣った性格」と「悪しき性格」との対比から思索を展開してきた。1770年代半ば以降、原則に従う行為能力のない「劣った性格」と確固不動の「悪しき性格」との区別の考察がなされた。後者に示されるような原則に忠実であることが「名誉」であるとの洞察が示される。そして、1780年代初頭頃以降、そうした思想が深化され、「劣った性格」と対比されるころの、自分との約束を守ることを第一とし、他者に対する約束を守ること、そしてこびへつらいをよしとしないという、ほんものの性格の三つの特徴が明確にされた。こびへつらいを強く諫める姿勢が、打ち出されたことは注目に値する。そこには陰口を語り合う状態が、快の感情に依存しない自由の行使を妨げているというカントの人間学的洞察があると考えられる。感性的刺激から独立した実践的な選択意志の自由がなければ、そもそも諸気質を切り替え、自ら性格を形成することはできないことになる。この時期、性格概念を巡り、こびへつらいの概念の価値の引き下げと、実践的な選択意志の自由概念の価値の引き上げが同時に起こったと考える。

人間学講義の「性格」論において、年代別の人間の発達に関する叙述が散見する。これらについてのカントの教育論との関係性に関する検討は、別個の研究を要するであろう。また、本稿では論じることはできなかったが、人間学講義の「性格論」において、「原則に従ったつつましき(Bescheidenheit)」を扱う文脈で、「良心的であること(Gewissenhaftigkeit)」が、宗教においてとくに重要であることが強調されたり(XXV 1173)、宗教における規則の遵守が、「原則に基づくのではなく、処罰への「恐怖」といった感覚に基づく場合、それは、「道徳的性格に反する」と述べられたりしている(XXV 1390)。こうした叙述のカントの宗教論との関連の考察もまた、別個の研究を要するであろう。

引用文献

- Albrecht, Michael (1994): *Kants Maximenethik und ihre Begründung*, in: *Kant-Studien*, 85, pp. 129-146, 1994.
- Eisler, Rudolf (1989): *Kant-Lexikon. Nachschlagewerk zu Kants sämtlichen Schriften, Briefen und handschriftlichem Nachlaß*, Berlin¹⁰1989 (1930).

井上義彦(1990)：『カント哲学の人間学的地平』理想社，1990年。

宇都宮芳明(2006)：『カントの啓蒙精神——人類の啓蒙と永遠平和にむけて』岩波書店，2006年。

河村克俊(2022)：『カントと十八世紀ドイツ講壇哲学の自由概念』見洋書房，2022年。

船木祝(2015)：「『人格の内なる人間性』についてのカントの思想形成——『個人』の道徳から『社会』の道徳へ」，『医療人育成センター紀要』第6号，pp.9-16，2015年。

船木祝(2020a)：『響き合う哲学と医療』中西出版，2020年。

船木祝(2020b)：『カントの思考の漸次的発展——その「仮象性」と「蓋然性」』論創社，2020年。

マンフレッド・キューン(2017)：『カント伝』菅沢龍文・中澤武・山根雄一郎訳，春風社，2017年。

※本稿は、日本カント協会第47回大会、シンポジウム「カント『人間学』の世界——開講 250 年を記念して」の発表(2022年11月12日)における会員の議論から、いくつかの着想を得ています。